

R P データと S P データを用いた松本市における パークアンドライド導入に関する研究

平成 25 年 2 月 永田 和典

要旨

目的

地方都市では、自動車依存度が高く、公共交通の利用者減少、通勤者の多いピーク時間を中心に交通渋滞が頻発している。このような状態を改善する対策として、中心市街地への自動車の交通量の減少、鉄道への移行が期待できるパークアンドライド導入が望まれる。そこで本研究では、松本都市圏を対象とし、松本都市圏パーソントリップ調査データを用いて、意識データを交通手段選択モデルへ採用してパークアンドライド導入を検討する。

方法

モデルはパークアンドライド導入後における、過去の個人の選択結果のデータ（R P データ）と選好意識データ（S P データ）を用いて交通手段選択モデルを構築する。ここで、S P データはパークアンドライド導入後にパークアンドライドを利用する選好意識データを利用します。交通手段選択モデルへの S P データの導入方法は 4 パターン試み、それぞれ比較し、パークアンドライド導入後の交通手段選択予測を行う。

結論

R P データと S P データを複合した L O S データを従来のモデルに加えたモデルが最もパークアンドライドを利用する選好意識データに近く精度が良いと推定した。松本都市圏における R P データと S P データを用いた交通機関選択予測はパークアンドライド導入することによって、自動車を利用者数は導入前より 8 % 減少し、パークアンドライドを利用し鉄道利用者は 8 % 増加することが推測された。

指導教員 高瀬 達夫 准教授